

「2020年インドネシア大学スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学理学部4年 中村陸人

①学習成果

私が今回のプログラムに参加したことで得た学習成果は2点ある。1点目は、現地の言葉を使って現地の文化を吸収する能力である。今までにベトナムへ行った経験があったが、その際は現地の人と英語で会話するか、あるいは現地の人に日本語で話しその内容をベトナム語に通訳してもらうことでコミュニケーションをとっていた。しかし、今回のプログラムではインドネシア大学で学んだ実践的なインドネシア語を活かし、現地の人とインドネシア語を使って直接会話をする事が出来た。インドネシア語を使って直接対話をする事で、相手の考えを直接理解することが出来たし、自分の考えをよりスムーズに相手に伝えることが出来た。結果、インドネシア文化について、言葉で表現しにくいところまで理解し、また日本の文化についてインドネシア語で表現することができ、学ぶことが多かった。2点目は、異文化の共存について理解を深めることが出来た。インドネシアに住む人々の人種は多様であり、宗教もイスラム教が主だがキリスト教、ヒンドゥ教、仏教と様々である。また島ごとに独特の音楽や舞踊がある。このような多種多様な文化がお互いを排除することなく、共存しあっている点もインドネシアの特徴なのではないかと感じた。確かに日本も地域ごとにいろいろな文化が存在するが、インドネシアに比べると地域間の違いは小さいように感じる。インドネシアは日本に比べて人口や面積も広く、多くの文化がうまく共存していた。自分の文化や価値観のみでなく、相手の文化や価値観に対しても理解出来る能力は、今後ますますグローバル化が進む中でより必要とされる能力であり、その能力の一部を今回のプログラムで得られたことは非常に有意義であった。

②インドネシアならではの経験

文化交流で、バティックのハンカチ制作、ガムランという楽器の演奏、ムナーリというインドネシア舞踊の体験を通じ、座学のみでなく実際に体を動かして、インドネシア文化に触れることが出来たのが今までには無かった有意義な体験であった。また、講義で日本語をインドネシア語に翻訳する際の方法論を学ばせていただいた。日本独自の文化や風習を、インドネシアの人々に理解できるようにどのように工夫すればよいのかについて学び日本文化について再度見直す機会になっただけでなく、インドネシアの文化に関してもより深い知識を得ることが出来た。

③プログラム内容

今回のプログラムはインドネシア語やインドネシア文化を2週間のインドネシア滞在で学習するプログラムである。講義のみでなく、実際の文化体験(バティックやガムラン等)を通じて、より実践的にインドネシア文化を吸収することが出来た。また現地の学生との交流を通じて、これからの日本とインドネシアを担う若者同士で交流でき、非常に有意義だった。

④今後の進路への影響

今回のプログラムを通じ、将来はアジアだけでなく世界で活躍できる人間になりたいと思うようになった。インドネシアで学んだ異文化理解能力を活かし、今までに自分が行ったことがある国だけでなく、これまでに訪れたことがない国の人々とも積極的に交流していきたい。